巻頭言

留学生センター長　五味政信

留学生センターのこの 1 年を、新たな事業展開に焦点を当てながら振り返り、同時にセンターのこれからを展望してみたい。

留学生センターは 1996 年の設立以来、「留学生のための教材の開発」を重要な事業と位置付け、『学術日本語シリーズ』という名称で専門日本語教育教材を刊行してきた。このシリーズは現在 10 巻を数えるが、2007 年度は第 11 巻の刊行（中期計画記載事項）を企図している（ちなみに第 10 巻のタイトルは『留学生のための専門分野の語彙と表現＜経済学・商学編＞』、第 11 巻は『留学生のための社会科学日本語読本』＜仮称＞）。本シリーズは学内で教科書として使用され、留学生に歓迎されているだけでなく、国内の諸大学をはじめ、海外の協定校やその他の教育機関等（例えば、独ハンブルク大学、ベルリン図書館）からも高い評価を得ている。また、留学生センター編として出版した『留学生のためのストラテジーを使って学ぶ文章の読み方』（スリーエーネットワーク社、2005 年）は 07 年 3 月には 3 刷となった。同書は 2006 年に台湾の大新書局から翻訳版も出版され、好評を博しているとのことである。今後は、これまでの「教材重視」の姿勢を堅持しながら、同時に教材開発を支える研究活動も外部資金を獲得して力を注いでいくことが重要になろう。

2005 年度からセンターが主催し、主として日本人学生向けプログラムとして短期海外研修（豪州 Monash 大学、2 月～3 月の 4 週間、異文化理解を主眼とした研修）を開始したが、2006 年度も同様にこのプログラムを実施した。両年度とも実施に当たっては、複数の大学が一橋と合同している。初年度は一橋と東京工業大学、大阪大学の 3 校（部分的に合同）、06 年度はこの 3 大学に加えて東京医科歯科大学、東京学芸大学、東北大学が加わり計 6 大学の合同実施となった。複数の大学での合同実施には次のようなメリットが考えられる。①一定規模の人数が集まることによって経済的なスケールメリットが生まれる、②数十名の参加者を得ることによって学生のレベルに合った、より細やかな複数クラス分け（英語授業）が可能となる、③他大学の学生との交流が学生に大きな刺激を与える（②③については、帰国後の学生に対するアンケート調査の結果からも裏付けられている）。3 回目の今年度は、以上のようなメリットを意識しつつ、コンソーシアムの形成に向け、本学「国際戦略本部」担当者の協力を得て、関係大学との調整を図っていく予定である。さらに、今年度は大学執行部の支援を得て、中国への短期海外研修（北京市内の大学、4 週間程度）を計画しており、学内関係者、本学北京事務所との調整に入っている。

2005 年度にスタートした大学院の連携講座（日本語教育学位取得プログラム、言語社会研究科・国立国語研究所・留学生センターの 3 者の連携）は今年の 3 月に第 1 期修了生 10 名を送り出した。修了生たちがそれぞれの進路で、このプログラムを通じて培った研究の

遂行力と日本語教育者としての実践力を、次のステップで生かしてほしいと教職員一同願っている。この 4 月からは博士後期課程（定員 4 名）が発足し 6 名の学生が入学した。修士課程在籍者 24 名を加えて、このプログラムでは現在 30 名の学生たちが研究を行なっている。修士 1 年生から博士 1 年生までが一堂に会する月 1 回の合同ゼミは、今年度から急ににぎやかさが増し、教室が手狭になったように感じられる。学生による自主ゼミや研究会の発足、論文集の刊行など、新たな活動が生まれており、在学生の研究活動の拡がりと修了生の活躍など、今後の展開が大いに楽しみなプログラムとなっている。

1996 年度設立の本センターは昨 2006 年に設立 10 周年を迎え、その記念事業として、これまでセンターの「日本語研修コース」（大学院入学前準備教育）を巣立っていった全修了生の追跡調査を始めた。1996 年 10 月に第 1 期生を受け入れたこのコースは、2007 年 4 月には 22 期生を受け入れているが、21 期生までのコース修了生は約 200 名を数える。現在、修了生から、その連絡先・現職などの情報、センターでの学びとその後のキャリアについての報告が届いている。先日、連絡があったスイスの J 君（6 期生、1999 年度）はジュネーブで弁護士として活動しているが、日本企業との仕事では契約書等の説明に日本語を使う場面もあると報告してくれた。センターを巣立っていった留学生からの連絡の中に、その後の人生の中で日本語が大きな位置を占め、研究や仕事に日本語を使用しているといった記述を見つけて、温かな心持ちになるのは私だけではないだろう。センターにとって大切な「宝物」のような修了生たちの情報を集め、ネットワークを組み、修了生とセンター双方にとってプラスになる形を求めて、今後も追跡調査に力を注ぐことにしている。

留学生センターはその設立以来、センター長をセンター内から選出してきている。最近、他大学の留学生センター教員から「センター内からセンター長を出すことのメリット、デメリットは何か」と問われたことがあった。メリット、デメリットとも種々あろうが、本センターにとっての大きなメリットの一つについて、この 10 年を振り返って次のように回答した。「センター教員が進もうとした方向にうまく進めず、苦しい立場に追い込まれた時も、当たり前だが、頼るものは自身の力のみ、良くも悪くも自力でやり抜くという気概をもって進めたこと、それによって教員間の結束力を強めたこと」。留学生教育の最前線に立つ部局として、今後も大いなる気概と結束力を維持していけることを願っている。

2002 年 4 月以来、兼務教員を引き受けてくださった太田浩先生（商学研究科専任講師）は今年度から本学国際戦略本部准教授に配置替えとなった。太田先生は前述の豪州への短期海外研修事業を推進するなど、広い視野からセンターにとって必要な業務を推進してくださった。07 年 4 月からは太田先生に代わり、阿部仁先生（商学研究科専任講師）が兼務教員をお引き受けくださっている。お二人の先生に心から感謝申し上げたい。

2007 年 7 月